

湯たんぽの形態成立とその変化に関する研究Ⅳ

Analysis of foot warmers or hot-water bottles
from the standpoint of their formative process Ⅳ

伊藤紀之

Noriyuki ITO

はじめに

モノの変遷をみると、そのモノが使われた時代背景とその時代の技術、特に素材と加工と形態は深く結びついている。冬場の暖房、体温の保持という衣服と密接な関係を持つ湯たんぽを事例として、それらの関係を検討する。今回、扱う湯たんぽは日本国内で収集してきたものが中心であるが、一部海外の資料を比較資料として取り上げる。

明治後半から、湯たんぽが一般の生活に普及するに伴い安価で量産が可能な方法が工夫された。西欧で開発された石膏型の技術を導入し、その技術を使った陶磁製の湯たんぽやプレス加工を使った金属製品の湯たんぽなど、多様なバリエーションが生み出された。その結果、人々は、自分の価値観でモノを選択できる湯たんぽのファッション化の時代が出現したといえよう。今日、省エネルギーやエコロジーの視点から、新たなファッション化が加速されている。

今回は、初期の湯婆（たんぽ）段階から湯湯婆（ゆたんぽ）の語が生まれる明治中期までの期間、大量生産が始まるまでを対象に、湯たんぽの形態成立とその変化を検討する。

1. では、これまで知りえた最も古い湯たんぽは、湯婆（たんぽ）と呼ばれた時代の桃山期から江戸初期のものともみられる美濃で出土した湯たんぽ、および家康と家光の遺品とされる湯婆の検討を行う。

2. では、『和漢三才図会』正徳2年（1712）に示された湯婆を中心に、江戸中期以降の類型の検討を行う。

3. では、明治期の文明開化の時代に、海外との交流の中で西欧のfoot warmer, hot-water bottleをヒントに生み出したと考えられる日本各地の湯たんぽを資料として、その素材と手わざの多様性を検討する。

1. 桃山から江戸初期の湯たんぽ

これまで得られた資料の中で、最も古い湯たんぽは岐阜県多治見市小名田出土の「黄瀬戸織部流し湯たんぽ」（図1）である。出土の陶片から復元されたものであるが、複数個分の陶片が確認されており、ある程度の量産されたことが判明している。この湯たんぽの形態がどこから来たかは、明確な資料はないが、次のことが推定できる。

暖房以前に、日常生活には火の保持が重要であった。一年中、種火を入れて置く道具として行火が生まれた。西洋でも1827年、J・ウォーカー（英）が実用的な摩擦マッチを発明するまでは同様であった。行火は「行火炉」の略、行は持ち運びができるという意味がある。種火の保持、移動の道具であったが、冬場は暖房具として手焙り、足焙りに利用された。本来の火種の保持から、暖房具に変わっていったと考えられる。

それをうかがわせる道具に石製「バンドコ」がある。「バンドコ」は行火の別名でもある。

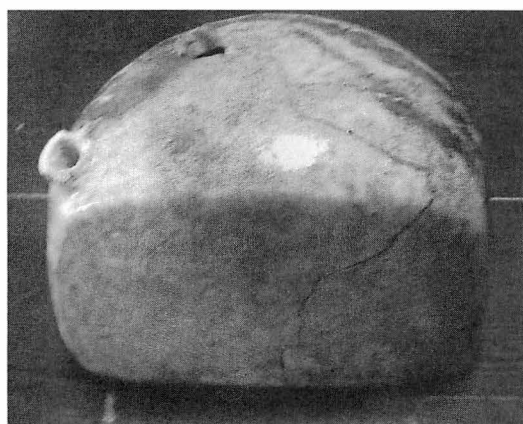


図1 黄瀬戸織部流し湯婆 155×235×172

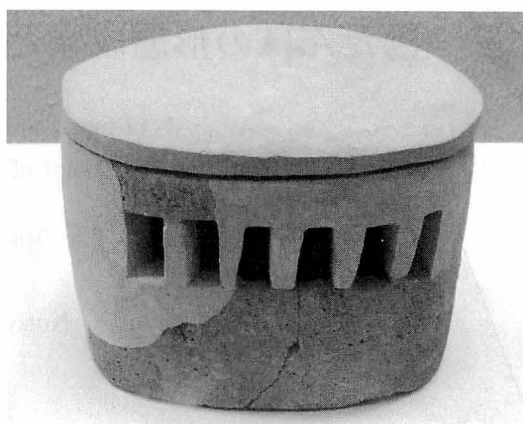


図2 バンドコ、鳥根県安来市立歴史資料館



図3 行火 滋賀県で採取

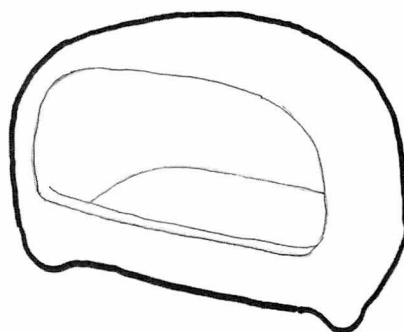


図4 素焼きの行火の外形

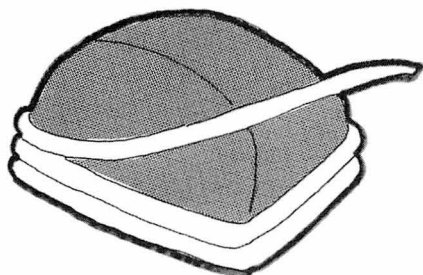


図5 手びねりの制法

鳥根県安来市立歴史資料館に展示されている戦国時代の富田城跡三の丸からの出土品(図2)である。福井産笏谷石製暖房具と説明されている。富田城城主、尼子義久は毛利元就に城を包囲され永禄9年(1556)に降伏し落城した。したがってこの種の行火は16世紀中期からある行火、暖房具である。

これとほぼ同じ石製の行火がある(図3)。滋賀県で採取した伝世品で凝灰岩の一種、福井県の足羽山の笏谷石で作られたと思われる。行火は室町時代からあったとされ、加工しやすい石が産出される場所では石で、また多くは素焼

き(図4)の行火が作られた。

この素焼きの行火の開口部を閉じた形状と多治見市出土の「黄瀬戸織部流し湯たんぼ」の形状はほぼ同一である。従って、現時点で最古と考えられる湯たんぼは行火の火種の代わりに、湯を熱源としたものと考えられる。制法は手びねりである。ひも状の粘土を渦巻状に積み上げていくもので、同一のモノを作るためには簡単な型を使ったと思われる(図5)。この「黄瀬戸織部流し湯たんぼ」の織部釉は銅が素材であり、当時は高価な釉薬であった。一般の庶民が使うものではなかったと考えられる。

また湯を使うこと自体贅沢であったと考えられ、一般的には火種を使った行火が使われ、近年まで使用されていた。

2. 家康の湯たんぼ

伝世品として現存する湯たんぼで、桃山から江戸初期のものとして伝えられる徳川家康の遺品「桑木地葵紋散蒔絵湯婆」(図6)は脇息のように凭れかかるものである。構造は桑の木地で作られ蒔絵で葵紋が描かれている。内部に錫の板が張られている。蓋は落し蓋である(図7)。

この類型は今のところ他に発見されていない。しかし、湯たんぼの起源として酒器の応用が伝えられる。文献には桐などの木製、銅製や陶器などで作った酒器に湯を入れ身体を暖めたとある。江戸期の酒器をみると、サイズは異なるが「桑木地葵紋散蒔絵湯婆」と類似の形状が見ら

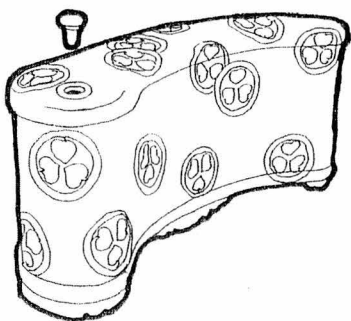


図6 家康遺品「桑木地葵紋散蒔絵湯婆」381×842×29

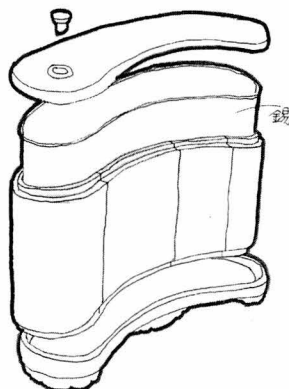


図7 構造図



図8 酒器(山形) 110×190×75 酒器
(金沢) 165×180×80



図9 酒器 95×265×50 (125)

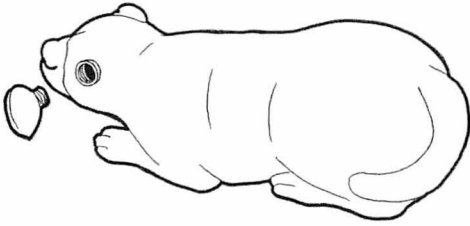


図10 家光遺品、犬型銅製の湯婆 概寸、200×500×300

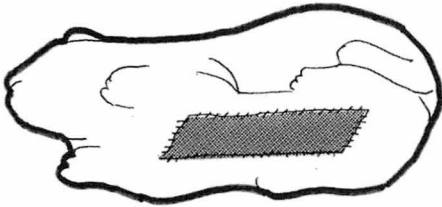


図11 犬型銅製の湯婆の底

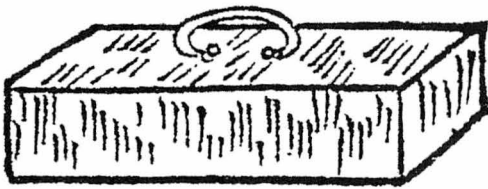


図12 和漢三才図会の湯婆図

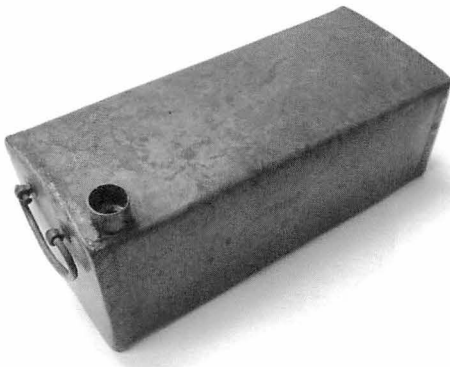


図13-1 湯婆、岐阜県で採取 88×308×113

れる(図8)。この酒器は底板と上板の周りに木皮を巻き、漆で固められている。山形県で採取されたものであるが、明治初期のモースが収集品にも入っている。携帯用の酒器には木製が多い(図9)。同類のものは山形県鶴岡市の致道博物館にも収蔵されている。小型湯婆としても用いられていたものを拡大して、将軍使用の豪壮な湯婆が誕生したと思われる。

3. 家光の湯たんぼ

日光の輪王寺宝物殿収蔵の家光遺品、犬型銅製の湯婆(図10)がある。塗金が施され犬の耳はネジが切れ湯口になっている。日本の技術史において南蛮渡来の鉄砲の再現に際して、日本には元来ネジの文化がなく、ネジ加工に苦勞したことが伝えられる。これは左回しの逆ネジである。銅製の鋳造品である。犬の腹部、下側に鋳造時の鋳型をかき出す開口部をロウ付けて塞いでいる(図11)。ネジに関する特徴、犬の形状や、その類型やその後継も見当たらないので舶来品の可能性が高い。

4. 江戸中期の湯たんぼ

和漢三才図会に湯婆が図示されている(図12)。「銅で作られ、枕ぐらいの大きさ、小口があり、

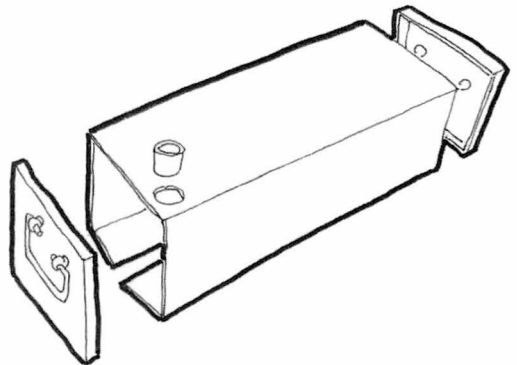


図13-2 構造図



図14-1 湯婆、石川県で採取 150×345×82

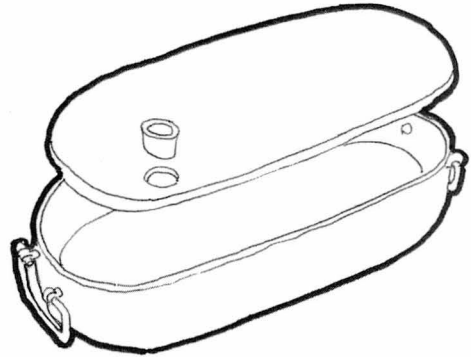


図14-2 構造図
オランダ、18世紀末、錫 165×175×105



図15-1 湯婆、岐阜県で採取 87×339×71

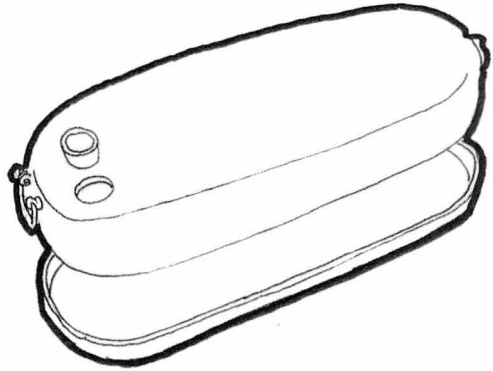


図15-2 構造図



図16-1 湯婆、富山県で採取 165×303×90



図16-2 構造図

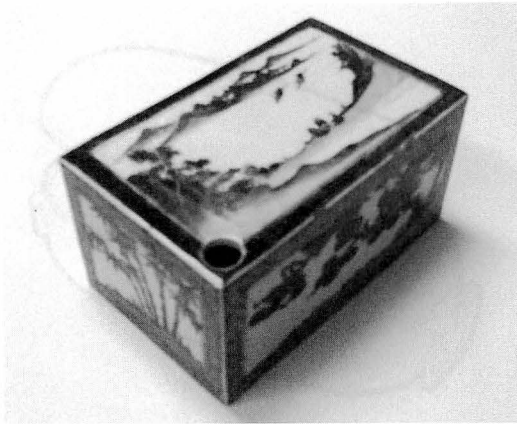


図17 伊万里、文政年間 135×215×115

湯を入れ、褥の傍らに置き、腰脚を暖める」とある。この類型と思われる江戸期の資料を図示する(図13-1)、板金の折り曲げ構造(図13-2)、器状に鍛金加工によるもの(図14-1,14-2)、被せ蓋状に鍛金加工によるもの(図15-1,15-2)、給排水部にネジ加工が施されたもの(図16-1)とその構造を示す。(図16-2)。江戸中期から幕末を経て明治初期まで作られていたと考えられる。このタイプは比較的多くあることから、広く使われたものと考えられる。

銅製から磁器に置き換えたものとして、和漢三才図会の湯婆と形状似たが磁器の湯婆がある(図17)。文政期の年号が記された伊万里焼の湯たんぽである。上面、側面には手描きの染付けが施されている。

5. 明治の湯たんぽ

明治維新を迎え、文明開化の波は各方面に押し寄せた。その中に西欧から伝えられたと考えられる筒型の湯たんぽがある。その形は江戸期からある日本の湯たんぽの類型は見当たらない。明治中期に登場し、爆発的に普及した湯たんぽは、同じ時期の西欧の湯たんぽに酷似している。明治中期以降に全国各地の窯場に登場した湯たんぽは、熟練した職人の手わざによるものであった。同じ頃、それまでの湯婆(たんぽ)から湯たんぽの言葉が生まれたと考えられる。

オランダに18世紀の錫製の湯たんぽがある(図18)。その後継と考えられる19世紀末の英国の湯たんぽ(図19)はすでに石膏型が使われ量産されていた。

西欧の湯たんぽを見た各地の窯場の職人たちは伝統的な須恵器(図20)、俵壺(図21)とよく似た形状であり、伝統的なロクロ、叩きの制法で作れると判断し、ほとんどの窯場で湯たん



図18 18世紀オランダ、錫の湯たんぽ 唐津焼 155×230×145



図19 19世紀末英国、ドルトンの湯たんぽ 145×300×145

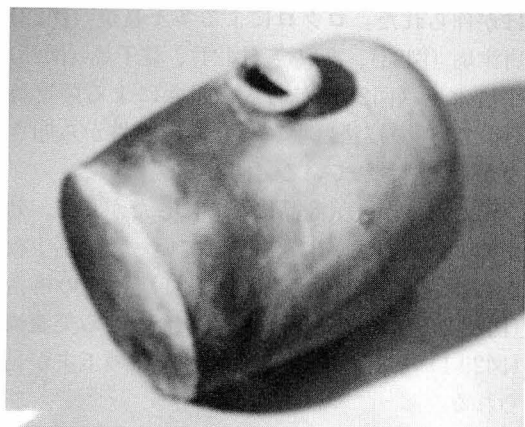


図20 須恵器、俵壺



図21 三島偏壺 80×170×100



図22 多々良焼 175×225×180



図23 唐津焼 120×245×135



図24 高取焼 130×240×130



図25 益子焼 150×260×150



図26 平清水焼、140×245×150

ぼが作られた。ロクロによる多々良焼(図22)、唐津焼(図23)、高取焼(図24)、益子焼(図25)、平清水焼(図26)がある。叩きによる薩摩焼(図27-1)の技法は手びねりで内と外から叩きながら成型されている(図27-2)。

湯たんぼが人気商品になるにしたがって、効率のよい制作法が生み出されていった。粘土板から組み立てる唐津焼(図28-1)とその構造(図28-2)、二つのパーツを組み合わせる美濃焼(図29-1)とその構造(図29-2)などの工夫が見られる。

次第に、熟練した職人に頼らなくてもできる



図27-1 薩摩焼、175×265×180

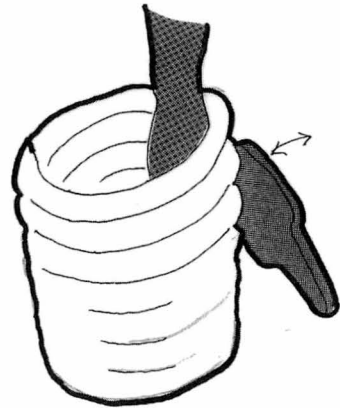


図27-2 叩きの制作法



図28-1 唐津焼、椎の峰窯 120×270×150

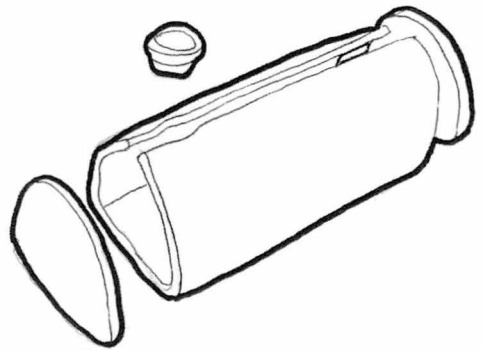


図28-2 制作法



図29-1 美濃焼 165×275×165

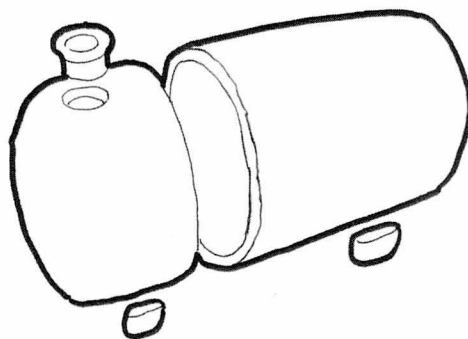


図29-2 制作法

型を使うものが多く見られるようになっていく。明治後半からはヨーロッパから導入された石膏型の技術が登場し、生産性の向上が計られ、同時に画一的なものが多くなり、個性的なものが少なくなっていくと考えられる。

参考文献

1. 高橋幹夫著『江戸の暮らし図鑑』芙蓉書房出版（1995）
2. ローレンス・ライト著（別宮貞徳、他訳）『暖房の文化史』八坂書房（2003）
3. 伊藤紀之「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅰ」53,25-32共立女大,家政紀要（2007）
4. 伊藤紀之「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅱ」54,67-73共立女大,家政紀要（2008）
5. 伊藤紀之「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅲ」55,1-8共立女大,家政紀要（2009）